

「漢字には子どもを伸ばす不思議な力が秘められている」

日本漢字教育振興協会理事長(元船橋市立法典東小学校校長)

土屋秀宇氏

石井式漢字教育の実践から遠ざかって久しかったのですが、小学校の現場で、ふたたびその実践を試みることを思い立ったのは平成二年、私が船橋市立法典東小学校に校長として赴任することになったときでした。

私自身、学生時代から国語国字問題に関心があり、「国語問題協議会」の会員でもありましたので、「ひらがな先習」や「読み書き同時学習」、「しどう車」「注しゃ」といった「交ぜ書き」など、現行の国語教育の弊害を指摘されてきた石井先生のお考えには、以前から深い共感をもっていました。ところが、現実問題として長年中学の英語教員をしていた私には、直接、国語教育に関わる機会がありませんでした。それが校長職となり、はじめてチャンスが巡ってきたというわけです。

石井式漢字教育の実践にあたって、まず最初にすべきことは現場の先生方の理解と同意を得ることでしたが、学習指導要領どおりの「ひらがな先習」に何の疑問も感じていない先生方の固定概念を打ち破ることは思いのほかたいへんな作業でした。

そこで私は、二つの方向から説得を試みることにしました。一つは、お子さんをおもちの先生に、実際に家庭で試してもらって、「子どもにとっては、漢字のほうがひらがなより数段覚えやすい文字である」ということを実感してもらう方法です。

そして、もう一つが、大脳生理学からのアプローチでした。人間の脳は幼児期から小学校低学年までは、まだ右脳優位の時代です。一方、言葉の活動は通常左脳の働きによるもので、ひらかなやカタカナ、そしてローマ字、アラビア文字など、表音文字はすべて左脳で処理されます。

ところが、その中であって、ただ一つの例外が漢字なのです。漢字だけが左右両方の脳を同時に使って処理されているのです。しかも、「やま」とひらがなで書いて見せた場合に比べ、漢字で「山」と書いて見せた場合のほうが脳の中で処理されるスピードは何倍も速いわけです。

ですから、右脳優位で生きている低学年の子どもにこそ、ひらがなより漢字のほうがはるかに覚えやすく、また理解しやすい“嬉しい文字”なのです。

こんなことを根気よく力説し続けていくうちに、先生方の気持ちが一つになって、全校を挙げて漢字教育の実践に取り組みはじめたのは、赴任して三年目の平成四年度からのことでした。この平成四年度というのは、ちょうど文部省の学習指導要領が改められ、学年別配当漢字以外でも、ふりがなをつければ提示してよいなど、漢字に対する扱いが多少弾力化した年でもあります。その意味では、まさに機が熟してのスタートだったと言えるかもしれません。

さて、その実践の具体的内容ですが、

読み先習

解字指導

名詩・名文の朗読・朗誦

の三つを大きな柱としました。

の読み先習については、まず漢字で教える環境づくりとして、入学当初から児童の氏名はすべて漢字で表記し、プリント、掲示物などでも漢字で書くことが常識とされている語句ははじめから漢字で示し、必要に応じてルビを用いるようにしました。

そして、国語の教科書には、頻度の高い言葉や漢字に直したほうが理解しやすい言葉(たとえば「しゃ道」は「車道」など)は、ひらがな表記された本文の上に漢字を貼り付けていく“貼り漢字”を施すとともに、他教科においても漢字表記のほうが理解を助けると思われる語(たとえば「さんかくけい」は「三角形」、「防さ林」は「防砂林」など)については、漢字で教える試みをしました。

すると、漢字表記のほうが「角が三つある形だから三角形」というように言葉の意味がイメージとして捉えやすいため、これまでのひらがな中心の指導と比べ、子どもたちの学習に対する理解や意欲が明らかに違ってきました。

さらに、国語の教科書に貼り漢字をする過程で同じ漢字をくり返し読むため、各単元のはじめにその作業を終えると、すでに多くの子どもがすらすら音読できるようになっているという、予期しない効果が顕著であることもわかりました。

の解字指導は、教科書に出てくる主要な新出漢字について、その成り立ちから意味を理解させる試みです。たとえば「雪」という字の下の部分「ヨ」は手を表していることを話し、「お空から雨が降ってきて、手のひらに乗るようになったものは何だろう？」と聞くと、子どもたちは元気よく「ゆき！」と答えます。

また、「右」と「左」の筆順は、「右」がまず斜めの払いを先に書き、「左」は横線を最初に書くように教えます。イメージの右脳から論理・分析の左脳へと移行する時期にある子どもたちは、当然「どうして？」と疑問に感じます。ところが、小学校の先生のほとんどが、この疑問に答えてあげていないのです。このような疑問も、漢字の成り立ちを示してあげることで、すっきりと説明がつきます。そして「へえ！、そうだったんだ！」「面白い！」という驚きや感動があるので、一度教えると子どもたちは忘れることはありません。

さらに素晴らしいのは、解字指導を続けていると、子どもたちは新しい漢字に出合っても「先生、待って。教えないで」と、まず自分たちで推理したり「じゃあ、自分の名前にはどんな意味があるんだろう」と進んで辞書を引いたり……と、自分の頭で考える意欲や自分で調べて知る喜びが自然に生まれてくることです。

低学年のうちから漢字を積極的に与えていくことに反対の立場の人たちは、現在の小学校の配当漢字 1,006 字でも「多すぎる」と主張します。確かに、一年生で「糸」、二年生で「線」を習い、四年生になっ

てやっと「氏」が出てくるというように、何の脈絡もなく個々の漢字をバラバラに教えていく今の教育法では、子どもたちの負担は相当なものです。

ところが、低学年ではまず単体の象形文字からはじめ、高学年にいくにしたがい、それらを部首として組み合わせた文字を学習するというよう

に、体系的な解字指導を行っていけば、苦もなく漢字を学べるだけでなく、こちらから全部教えなくとも子どもたちが自発的に考え、理解することまで可能になるのです。

の名詩・名文の朗読・朗誦は、語彙や表現の宝庫である古典、名作を通して、美しい言葉や豊かな感性を育むことを目的に、帰りの会などの短い時間を利用して、漢字の組本(低学年)、『蜘蛛の糸』『安寿と厨子王』などの名作(中・高学年)に加え、詩、俳句、諺、漢詩、『百人一首』などに取り組みました。

ここで改めて実感したのは、子どもたちは、漢詩や和歌、俳句など文語文特有のリズムや音の響きが人好きだということで、ある先生が「今日は会議があるので、お休みにしよう」と言うと「ダメー」の大合唱

• 学校教育

- ・しゃ道 → 車道
- ・糸 → 紙 → 氏



• 体系的教育

- ・糸 → 氏 → 紙
- ・雪 (ヨは手の意味)
- ・^{しゃ}車道



体系的な解字指導を行なうべき

になったこともありました。

漢詩は、まず先生が模造紙に書いた白文(返り点や送りがなのないもの)を指差しながら範読したあと、子どもたちが先生に続いて読んでいくのですが、その上下に行ったり来たりしながら読む、というのがまた、子どもたちには面白いらしいのです。

その漢詩に関して、こんな興味深い事例もあります。ある一年生のクラスで、教えたばかりの漢詩を「もう読めるようになったから聞いて」と言って毎回、先生のところへやってきた子どもが三人いました。そのうち二人はたいへん成績の優秀な子でしたが、もうひとり主要四科目は全部下位の子どもです。しかし、その下位の子ども、他の二人に少しも遜色なく、正確に読めるようになっていることがわかりました。

こうしたちょっと意外な結果も、すでにお話した大脳生理学の観点からなら、容易に理解できます。成績が下位の子どもは、どちらかというと論理・分析の左脳の働きが弱いのです。ところが、ひらがなやカタカナと違い、漢字なら右脳でも処理できるので、成績下位の子どもでも楽しく参加でき、自信がついてくる。すると、学習への意欲も増し、成績も上がってくるという、素晴らしい循環が生まれるのです。

これは、自閉症やダウン症などのいわゆる知的障害児についても言えることで、彼らは、ひらがなよりも漢字を好む傾向が顕著です。

実際、私が次に赴任した船橋市立船橋小学校の特殊学級で漢字学習を取り入れると、子どもたちは生きいきとした表情で漢字を読み、理解力や発語・コミュニケーションの能力でも飛躍的な進歩をみせる

ようになりました。

漢字には、このような“靈妙な”とでも表現したくなるような、子どもを伸ばす不思議な力が秘められています。それも「人間は言葉の動物である」ということを考えれば当然のことです。人間は生まれながらに言葉を欲しているのですから、その言葉を子どもがいちばん消化しやすい“漢字”という形で与えてあげれば、黙っていても子どもたち自らが旺盛な食欲でそれらをどんどん吸収しはじめるのです。

ところが、これまでの学校教育では、漢字はふさわしい時期、内容、方法で子どもたちに与えられず、いちばん漢字を覚えやすい時期（低学年）にひらがなから教え、読み書き同時学習を強いることで、たくさんの漢字嫌い、国語嫌いの子どもを生み出してきました。これは、教育としては明らかに失敗だと言ってもいいでしょう。

法典東小での漢字学習への取り組みは、私の転任後も続けられ、その成果により平成6年には、第43回読売教育賞の国語部門で優秀賞を受賞しています。こうしたことが、従来の国語教育のあり方に一石を投じることになればと思います。

そして、栄養のぎっしりと詰まった漢字という智恵の実を子どもたちに、もっと美味しく食べさせてあげる、そんな漢字指導が教育の現場に広がっていくための、一つのきっかけになることを心から願って止みません。